修学旅行「歌日記」

(1)　力合わせ描きし旅への青写真　決意も新たに友垣(ともがき)集いて

旅行前日の体育館での最後の確認集会。旅行業者・写真屋さんも一緒

(2)　お互いの心触れ合い学び合う　見知らぬ街へ体験旅行

当日、さぁいよいよテーマを達成するために道南へ向けて出発…

(3)　見上げれば五月の空ぞ青く澄み　出発(たびだち)の朝　揚(あ)げ雲雀(ひばり)鳴く

グランドに集まった時、五月の空は青く、ヒバリが鳴いている

(4)　空知野を高速バスはひた走る　旅に膨らむ子等が夢乗せ

田んぼの畔に水が引かれた空知平野を、バスは札幌へ向けて走る

(5)　川面には五月の光り弾(はじ)けたり　藻岩の山を遥かに望みて

札幌市街。信号待ちの豊平川の橋の上から遠くの藻岩山を見ると

(6)　柔らかき光の下にオルガンは荘厳に奏でし　バッハの曲を

照明がオルガンを照らす中、大ホールにバッハの曲が流れる

(7)　荘重に調べ流れし大ホール　若き奏者の背中まぶしき

ひたすらに演奏する二十代のオルガン奏者の姿がまぶしく感じた

(8)　「聖母への祈り」静かに流れ来て　旅の心に安らぎぞ増す

まだ旅の始まりだが、演奏は旅心の緊張を解きほぐしてくれる

(9)　アンコール！応えし曲は「浜千鳥」　緊張ほぐれホールなごめり

聞きなれた「浜千鳥」の調べは、聴衆の心を和ませてくれた

(10)　初演なり　学年合唱小ホール　愛宕の子等の歌声さわやか

このような学年合唱演奏は、このホールでは初めての試みとのこと

(11)　中島の淡き緑の樹間(このま)越し　コンサートホール凛と見えたり

想い出を作ったホール。子どもたちには充実感があったに違いない

(12)　右樽前　左に望む太平洋　真中を進むバス軽やかに

樽前山と太平洋を左右に見ながら、5 台のバスは進んでいく

(13)　噴火湾　遥か彼方に駒ケ岳　山肌陽に染め嘶く如くに

噴火湾の彼方に見える駒ケ岳は、嘶（いなな）いているようだった

(14) ファイアーの炎見つめる二百余の視線の彼方　満点の星

高々と燃え上がる炎の上空は、壮大な星空が広がっていた

(15) 燃え上がる赤き炎に頬を染め　心も熱く夜は更けゆく

ファイアーの炎は、見る者の心も熱くしながら、時間が過ぎる

(16) 満点の星に抱かれ結ぶ夢　想い出作りの初日ぞ終わる

満点の星の下、修学旅行の第一日目は終わった

(17) カーテンを空ければ朝光まぶしくて　向かいの牛舎に乳牛の臥せ居る

宿舎の向かいは牛舎で、朝カーテンをあけると牛が寝そべっていた

(18) 緩やかな山の斜面の牧草地　鶯「ケキョ」と鳴き競いたり

朝の散歩。緩やかな斜面の向こうの樹間からは鳴き交わすウグイス

(19) 寝不足の目に陽光のまぶしくて　体験二日目静かに明ける

朝食に向かう子どもたちの目は、まだ眠そう…。静かな幕開け

(20) 白球がグリーンの上を行き交えば　子等が歓声　五月の空に

パークゴルフに興じながら、楽しそうな笑い声が響いてくる

(21) 駒ケ岳　遥かに望む牧場に　友情・研修共に深まる

雄大な自然の中で、子どもたちの研修は様々に深まっていく

(22) 聴衆は天に嘶く駒ケ岳　ステージ雄大　歌声ぞ響ける

訪れた家族ずれ、そして遥か彼方の駒ケ岳を聴衆に歌声が流れる

(23) 大沼と小沼鏡にたてがみを　撫でつけながら駒ヶ岳あり

大沼小沼を手鏡にして身繕いをするように、駒ケ岳が見える

(24) 弥次喜多の時代しのばす松並木　眠る子等乗せバスは走りぬ

東海道を思わす松並木を、寝不足の子を乗せバスは函館へと向かう

(25) 信仰と勤労業(わざ)とし乙女等は　心安けく神に祈るや

ひたすら勤労と祈りに明け暮れるというトラピスチヌ修道院…

(26) ひたすらに祈る禁断「修道院」　衣の僧侶拝観をせり

異教の修道院に観光で訪れたと思われる僧侶がいて、ちょっと驚き

(27) 黄昏の七重の浜にマーライオン　海を守りて立てり雄々しく

洞爺丸台風犠牲者の鎮魂でもある伝説の動物マーライオン

(28) 百万と言われる夜景今宵だけ　十倍の価値つけて感動

こんなすばらしい夜景なら、千万ドルに値上げをしても…

(29) 風と雲　遮るものなき臥牛山　百万ドルの面目躍如

夜景の素晴らしさに与えられた言葉も、今日は誰もが納得…

(30) 紺碧の水切り裂きて海峡へ　白きフェリーの航跡つづく

三日目の朝。青い水を切り裂くようにフェリーが津軽海峡へ出ていく

(31) 碧空の下に浮かびし臥牛山　グルメ散策　三日目の朝

自主研修の朝は、青空の下に函館山があざやかな見える素晴らしい朝

(32) バイキング　軽い朝食　海王館　　グルメ散策　期待の自主研

軽い朝食を取って、さあ「グルメ散策」へと出発だ…！

(33) 数々のトンネル抜けて高速道　噴火湾沿い洞爺への旅

函館から洞爺への道。噴火湾沿いのトンネルの多い道をバスは進む

(34) バスガイド　想い出作りの脇役に　成長遂げし教え子のいて

案内のバスガイドの一人は、以前勤務した学校の教え子であった

(35) 波頭　白き海原右に見て　5 台のバスは一路洞爺へ

高い位置を走る高速道から眺めると、噴火湾には波頭が立っている

(36) 五号線　ふと目に止めしコンビニは　家族四人で寄りしあの店

走るバスから眺めていると、以前家族で立ち寄った店があった

(37) さざなみを起こし明鏡洞爺湖は　五月の西日　明るく映せり

風に湖面がゆれる洞爺湖に、西日が明るく美しい

(38) 五月晴れ　秀峰羊蹄西日受け　洞爺の水に影を落とせり

遥か彼方の蝦夷富士羊蹄山もはっきりと見える。絵のような景色

(39) 数知れぬ子等と作りし想い出の　洞爺湖今日も美しくあり

何度、修学旅行で訪れたであろうか…。思い出の多い場所である

(40) 幾度も訪ねし洞爺なつかしく　羊蹄気高く聳えていたり

想い出の洞爺は、これからも羊蹄山と共に美しさを競って…

(41) 雲ひとつなき留寿都路を駆け抜けて　子等が期待のリゾート目指す

羊蹄山麓の畑作地帯を、リゾートでの研修を楽しみにバスは進む

(42) 遊具への期待と恐怖こもごもに　明日に夢を結ぶ四日目

明日はどんな遊具に乗るか、期待とちょっとの恐怖に三日目が終わる

(43) 残雪の斜面斑(まだら)にリゾートは　子等の夢乗せ春を迎えり

朝のリゾート。山の斜面のあちこちにまだ名残りの雪が白い

(44) やがて起こる子等が歓声知らぬ気に　ルスツの朝は静かに明けて

静かなルスツの朝。やがて子どもたちの楽しい研修の幕が上がるのだ

(45) 南から北へ届けるメッセージ　「天気祈るよ！」　炊事遠足

旭川では炊事遠足。お互いの天気を祈って南から北へのメッセージ

(46) 羊蹄に向かいクラブを振り上げて　白球打てば桜花散る

松本君、吉田さん、坂井･児玉先生との楽しかったパークゴルフ

(47) つづら折り　中山峠下るバス　募りし子等の里心乗せ

気負っていても、そろそろ家族が恋しくなった子どももいたのでは

(48) 大柄の身体疲れも何のその　旅安かれと祈り運転

運転手さんの名前「おおつかやすのり」を入れての一首

(49) 溌剌と一人笑顔を絶やさずに　子等をリードし愛限りなく

バスガイドさんの名前「はっとりえりか」を入れての一首

(50) 全力で楽しみ学んだ四日間　父母へ感謝し明日へつなごう

親への感謝を明日からの学校生活へのエネルギーに変えて欲しい